



幼稚園における言語の指導 (2)

今 葦 倍 素 行

第三部 言語テスト

目的

言語の発達からみて、子どもの各年令間における語彙には非常な差のあることがわかった。

幼稚園の保育内容中に「言語の指導」が、とり入れられているが子どもの言語発達上、保育を受けない子どもとの間に、果してその差があるであろうか。この問題を中心として、性による差・年令による差を研究して行きたい。

このような考えから、アーノルド・ゲゼル氏 (Arnold. Gesell M. D.) がその著書「The first five years of life」(文献9) に紹介されている「動作主体 (action agent) テスト」を実施してみた。このテストは理解能力をテストするもので、語彙量を測定するものではない。

(1)のテストはスタッツマンが「Performance tests for children of preschool age, 1926」及び「Mental measurement

of preschool children, with a guide for the administration of the Merrill-Palmer scale of mental tests, 1931」の二著にその成果を発表している。

保育を受けていない子どものテストをすることが不可能なので、現在幼稚園にいる子どもを保育年数別に考えることにした。

テストの場所

名古屋市立第三幼稚園

テストの期間

自昭和二十七年十二月一日 二十一日間

至昭和二十八年一月十七日

テスト人員及年令

全園児三百五十五名 (欠席児及びテスト不能者十六名を除く)

内訳

五才二ヶ年保育年長組

きく組

わくわく組

男	五三	六二	一一五	計
女	一七	二四	四一	
	一八	二一	三九	

うめ組

18 17 35

五才一ヶ年保育組

三八 四一 七九

はと組

17 21 38

四才三ヶ年保育年少組

一七 一六 三三

つばめ組

21 20 41

四才二ヶ年保育年少組

一七 一六 三三

なでしこ組

17 16 33

四才二ヶ年保育年少組

五一 四八 九九

もも組

17 16 33

ゆり組

15 16 31

すみれ組

19 16 35

三才組

一八 一一 二九

もみじ組

18 11 29

総計

一七七 一七八 三五五

テスト事項及び方法

子ども一人ずつ観察室に呼び入れ、口答試験によって行う。

検査者及び被検査者が十分に親しくなっていないと
いう原則に従って、話をしたことのない子どもや、不安がっている
子どもには、氏名を聞いたり、性別を聞いたり、その日の保育の話
をしたりして、落ち着いてから検査を始める。

豫備テスト

はしるものなあに？ (ran)
なくものなあに？ (c:y)
満足に答えられない子どもには答を教えてやる。納得できたら本テ
ストに入る。

本テスト

本テスト中は、暗示的な言語や表情などを絶対しない。子どもの
答をそのまま記録しておく。答えられない場合には、そのままにし
て次に進むこととした。

- 1 ひっかくものなあに？ (scratch)
- 2 ねむるものなあに？ (sleep)
- 3 とぶものなあに？ (fly)
- 4 かみつくものなあに？ (bite)
- 5 およぐものなあに？ (swim)
- 6 もえるものなあに？ (burn)
- 7 きるものなあに？ (cut)
- 8 ふくものなあに？ (blow)
- 9 うつものなあに？ (shoot)
- 10 とけるものなあに？ (melt)
- 11 みずのうえをはしるものなあに？ (sail)
- 12 にえるものなあに？ (boil)
- 13 ながれるものなあに？ (float)
- 14 うなるものなあに？ (growl)
- 15 さすものなあに？ (sting)
- 16 かけあしするものなあに？ (gallop)
- 17 いたいものなあに？ (ache)
- 18 ばくはつするものなあに？ (explode)
- 19 ほえるものなあに？ (roar)
- 20 ニャーニャーいうものなあに？ (meow)

採点の方法

次のようなものを指適した場合を正答として各一点を与える。
 (イ) 活動している主体を指適したとき、

〔例〕 ひっかくもなあに？ ↓ねこ・さる・つめ

(ロ) 目標になる事物が動作と結びついているとき、

〔例〕 きるものなあに？ ↓かみ(を切る)

(ハ) アクセントを混同したとき、

〔例〕 ふくものはなあに？ ↓ぞうきん

(ニ) 論理的連想による珍らしい答をしたとき、

〔例〕 ながれるものはなあに？ ↓ぎゅうりと、くつ

答がはつきりしないときは、もう一度聞きなおし、理由がはつきり答えられたときは正答とする。それ以外は誤答とする。

結果の統計

第一表 幼児個人得点表

第二表 クラス別による度数分布表

第三表 年令別による度数分布表

第四表 保育年数別による度数分布表

〔註〕 ○印……………正答

×印……………誤答

△印……………無答

平均値及び標準偏差は小数第二位未満四捨五入

保育年数によってみられる差の検討

第四表の平均をみると、同じ年令でありながら、保育年数によつて上表のような差のあることがわかる。

この差を有意な差として扱っていいものか。統計学的に検討してみると、十分に有意な差が認められ、保育効果が多大であるとの結論に達した。

尚、五才一ヶ年保育組と四才三ヶ年保育年少組との間にみられる差○・四一は有意な差ということとはできない。

五才一ヶ年保育組	平均	14.71	差	1.09
四才三ヶ年少保育組	平均	13.81	差	1.81
五才二ヶ年保育組	平均	15.80		
四才四ヶ年少保育組	平均	15.12		

〔統計学的な検討〕

・五才組

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
115	79	2.67	3.08	1.34	15.80	14.71	1.09 / 2.61

n ……………人数

S ……………標準偏差

F ……………分散の差

x ……………平均値

t ……………平均の差

分散の差(文献も、第二四四頁参照)

3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	○	×	△	備考
								△		X	△		△	X				20			
								X	X		X							14	3	3	
																		15	5		
																		20			
																		20			
								X		X	X		△					17	2	1	
																		18	2		
																		19		1	
								X			X		X					17	3		
								△		△	△		△	△	X			14	1	5	
X			△		X					X	△		△		△			12	4	4	
					X						X	X						16	3	1	
△			△								△		△	△		△		20			
													△	△				12		8	
															X			19	1		
								X										19	1		
										X	X					△		18	2		
					X		X						△	△		△		17	2	1	
								△	△		△				△			18		2	
			△					△	△		△				△			14		6	
								△					△	△	X			20			
					△						X							15	1	4	
												X						19	1		
			△				△						△		△			13		7	
							△	△		X	△	△	△	X	△	X		11	3	6	
								X										18	2		
△						X		△		X	△		△	X	△			12	3	5	
X						X					△			X	△			15	3	2	
								X	X		△				△			15	3	2	
										△	△	△	△		△			15	3	2	
			△							△	△	△	△	△	△			13	1	6	
													△	X				14	1	5	
			△			△		△		△	△	X						14	3	3	
								X		△	△	X						14			
															△			18	1	1	
															X			18	1	1	
								X										19	1		

第一表 個人得点表の1

(以下省略)

番号	氏名	得点	組名	性別	生年	月	日	満年齢	検査日	所 得 点	1	2
1	W.S.	20	きく組	男	21	4	25	6 ^年 8 ^月	12 ^日 3 ^時	4		
2	N.T.	14	"	"	21	5	19	6 ^年 7 ^月	3 ^時	5	X	
3	O.U.	15	"	"	21	5	21	6 ^年 7 ^月	6 ^時	5		
4	G.E.	20	"	"	21	7	10	6 ^年 5 ^月	6 ^時	6		
5	W.H.	20	"	"	21	9	15	6 ^年 3 ^月	3 ^時	5		
6	B.U.	17	"	"	21	9	29	6 ^年 3 ^月	4 ^時	7		
7	T.W.	18	"	"	21	10	4	6 ^年 2 ^月	3 ^時	4	X	
8	T.F.	19	"	"	21	11	4	6 ^年 2 ^月	1 ^時 10 ^分	5	Δ	
9	F.F.	17	"	"	21	12	1	6 ^年 0 ^月	12 ^日 4 ^時	5		
10	S.P.	14	"	"	21	12	15	6 ^年 0 ^月	4 ^時	5		
11	E.T.	12	"	"	21	12	13	6 ^年 0 ^月	4 ^時	5	X	
12	R.X.	16	"	"	22	1	1	5 ^年 11 ^月	4 ^時	6	Δ	
13	R.E.	20	"	"	22	1	2	5 ^年 11 ^月	4 ^時	5		
14	X.T.	12	"	"	22	1	23	5 ^年 11 ^月	4 ^時	7	Δ	Δ
15	Y.H.	19	"	"	22	2	5	5 ^年 10 ^月	4 ^時	7		
16	U.W.	19	"	"	21	2	15	5 ^年 10 ^月	4 ^時	9		
17	O.Y.	18	"	"	21	12	11	6 ^年 0 ^月	4 ^時	6		
18	B.E.	17	"	女	21	4	9	6 ^年 8 ^月	3 ^時	4		
19	E.W.	18	"	"	21	5	12	6 ^年 7 ^月	3 ^時	5		
20	O.H.	14	"	"	21	5	22	6 ^年 7 ^月	3 ^時	8		Δ
21	N.H.	20	"	"	21	6	9	6 ^年 6 ^月	6 ^時	4		
22	K.Y.	15	"	"	21	6	10	6 ^年 6 ^月	3 ^時	7		
23	Y.E.	19	"	"	21	7	15	6 ^年 5 ^月	3 ^時	5		
24	U.K.	13	"	"	21	8	7	6 ^年 4 ^月	3 ^時	4		Δ
25	D.H.	11	"	"	21	8	19	6 ^年 4 ^月	4 ^時	9		
26	T.C.	18	"	"	21	8	19	6 ^年 4 ^月	4 ^時	4	X	
27	F.S.	12	"	"	21	10	9	6 ^年 2 ^月	6 ^時	6		
28	W.N.	15	"	"	21	11	2	6 ^年 1 ^月	4 ^時	5		
29	C.B.	15	"	"	21	11	25	6 ^年 1 ^月	4 ^時	4		X
30	U.X.	13	"	"	21	12	12	6 ^年 0 ^月	6 ^時	5	X	
31	S.E.	14	"	"	21	12	13	6 ^年 0 ^月	6 ^時	4		
32	C.X.	14	"	"	22	1	1	5 ^年 11 ^月	6 ^時	6	X	
33	U.S.	18	"	"	22	1	1	5 ^年 11 ^月	6 ^時	4		
34	F.R.	18	"	"	22	1	5	5 ^年 11 ^月	8 ^時	5		
35	K.C.	19	"	"	22	1	29	5 ^年 11 ^月	6 ^時	3		

ば め	な で し こ	も も	ゆ り	す み れ	も み じ
女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計
1				2	2
2	2 1 3	1 1	1 1	1 1	1 1
2	3 4 7	2 2	1 1 2	3 3	1 1 2
1	3 1 4	1 1 2	1 2 3	1 1 2	1 1 1
4	7 2 3	2 1 3	4 1 5	3 3 6	1 1 1
1	5 2 3	2 4 6	1 1 1	2 1 3	2 2 4
1	3 2 3	2 1 3	2 3 5	4 4 4	1 1 1
1	3 3 5	2 3 5	3 3 3	3 1 4	7 3 10
3	4 1 5	3 3 3	3 3 3	1 1 1	1 1 1
2	3 2 3	1 3 4	1 1 2	1 4 5	1 1 2
	1 2 3	1 1 2	1 1 1	2 2	1 1 2
3	3 1 1	1 1	1 1 2	1 1 2	1 1 2
	1 1 1	1 1	2 2		1 1 2
			1 1		1 1
20 41	17 16 33	17 16 33	15 16 31	19 16 35	18 11 29
14.10 15.00	15.18 15.06 15.12	13.82 13.44 13.64	14.33 12.56 13.74	14.74 13.81 14.31	12.78 12.91 12.83
3.27 3.02	3.14 3.14 3.07	2.60 2.90 2.72	2.82 3.67 3.49	3.29 2.95 2.98	3.47 2.78 3.25

第四表 保育年数別度数分布表

		五歳二ケ年 保育年長者	五歳一ケ年 保 育 組	四歳三ケ年 保育年少組	四歳二ケ年 保育年長組	三 歳 組
		男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計
得	20	4 1 5	1 1		2 2	
	19	12 5 17	4 4 8	2 1 3	1 2 3	1 1
	18	7 8 15	5 5 10	3 4 7	6 1 7	1 1 2
	17	8 8 16	3 2 5	3 1 4	3 4 7	1 1 1
	16	7 3 10	5 6 11	1 2 3	9 5 14	1 1 1
	15	6 8 14	7 3 10	1 2 3	4 6 10	2 2 4
	14	5 10 15	2 4 6	1 2 3	4 8 12	1 1 1
	13	1 6 7	5 3 8	4 1 5	8 4 12	7 3 10
	12	3 6 9	1 5 6		4 3 7	
	11	5 5 5	1 4 5	1 2 3	3 8 11	1 1 2
点	10		4 1 5		4 1 5	
	9	2 2	3 3		3 2 5	1 1 2
	8			1 1		1 1 2
	7		1 1	1 1	3 3	1 1 2
6				1 1	1 1	
人 員	53 62 115	38 41 79	17 16 33	51 48 99	18 11 29	
平均値	16.62 14.94 15.80	15.21 14.24 14.71	15.18 15.06 15.12	14.31 13.28 13.81	12.78 12.91 12.83	
標準偏差	2.20 2.69 2.67	2.79 3.20 3.08	3.14 3.14 3.07	2.96 3.14 3.03	3.47 2.78 3.25	

第二表
クラス別度数分布表

		きく			きくら			うめ			はと			つ
		男女計			男女計			男女計			男女計			男
得	20	4	1	5										1
	19	3	2	5	6	2	8	3	1	4		2	2	4
	18	2	4	6	1	2	3	4	2	6	4	3	7	1
	17	2	3	5	4	2	6	2	3	5	1	1	2	2
	16	1		1	3	3	6	3		3	2	2	4	3
	15	1	4	5	1		1	4	4	8	3	2	5	4
	14	2	3	5	2	4	6	1	3	4	3	3	3	2
	13		3	3	1	1	2		2	2	3	2	5	2
	12	2	2	4		4	4	1		1		2	2	1
	11		2	2		2	2		1	1		2	2	1
点	10										4	1	5	
	9				1	1		1	1					
	8										1	1		
	7													
6														
人員		17	24	41	18	21	39	18	17	35	17	21	38	21
平均値		17.06	15.33	16.05	16.90	14.49	15.59	16.50	14.94	15.78	14.41	14.91	14.39	15.86
標準偏差		2.70	2.64	2.79	2.10	2.77	2.78	1.89	2.53	2.36	2.96	3.01	3.06	2.60

第三表
年令別度数分布表

		五 歳			四 歳			三 歳			全 閣		
		男女計			男女計			男女計			男女計		
得	20	5	1	6	2		2				7	1	8
	19	16	9	25	3	3	6	1		1	20	12	32
	18	12	13	25	9	5	14	1	1	2	22	19	41
	17	11	10	21	6	5	11	1		1	18	15	33
	16	12	9	21	10	7	17		1	1	22	17	39
	15	13	11	24	5	8	13	2	2	4	20	21	41
	14	7	14	21	5	10	15	1		1	13	24	37
	13	6	9	15	12	5	17	7	3	10	25	17	42
	12	4	11	15	4	3	7		1	1	8	15	23
	11	1	9	10	4	10	14	1	1	2	6	20	26
点	10	4	1	5	4	1	5				8	2	10
	9		5	5	3	2	5	1	1	2	4	8	12
	8					1	1	1		1	1	1	2
	7		1	1	1	3	4	1	1	2	2	5	7
6					1	1		1	1	1	1	2	
人員		91	103	194	68	64	132	18	11	29	177	178	355
平均値		16.09	14.66	15.36	14.53	13.72	14.14	12.78	12.91	12.83	15.19	14.21	14.70
標準偏差		2.59	2.93	2.74	3.03	3.20	3.11	3.47	2.78	3.25	3.07	3.09	2.97

$$F = \frac{S_2^2 \times \frac{n_2}{n_2 - 1}}{S_1^2 \times \frac{n_1}{n_1 - 1}} = 1.34$$

[註] 分子分母の関係は必ず $F \geq 1$ になるようにする。

自由度は 114 と 78 であり、F 分布表の 200 と 80 の欄の 5% の F_t でも 1.38 であるから $P\{F | N(1.34) > 0.5\}$ となり分散の差は認められなく。

◇平均の差 (文献 8、第二二〇頁参照)

$$t = \sqrt{\frac{n_1 S_1^2 + n_2 S_2^2}{n_1 + n_2 - 2} \left(\frac{1}{n_1} + \frac{1}{n_2} \right)} = 2.61$$

も分布表の自由度 120 の欄の 2.5% の t でも 10.025 = 2.27 であるから、 $P\{t | N(2.61) < 0.025\}$ となり、二つの平均の差は 2.5% 以下の有為水準で有意である。

[註] 自由度 120 の欄で 10.01 = 2.62, 80 の欄で 10.01 = 2.58 であるから 1% 以下の有為水準で、有為であると云えなくともなる。

• 四才組

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{n_1 - n_2}$	t
33	99	3.07	3.03	1.04	15.12	13.81	1.31	2.13

◇分散の差 $F = 1.04$

自由度は 92 と 98 であり、F 分布表の 40 と 100 の欄の 5% の F_t でも 1.51 であるから、 $P\{F | N(1.04) > 0.05\}$ となり分散の差は認められなく。

◇平均の差 $t = 2.13$

t 分布表の自由度 120 の欄の 5% の t でも 10.05 = 1.98 であるから、 $P\{t | N(2.13) < 0.05\}$ となり、二つの平均の差は 5% 以下の有為水準でもつて有意である。

• 五才一ヶ年保育組と四才三ヶ年保育青年少組

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_2 - x_1}{n_2 - n_1}$	t
79	33	3.08	3.07	1.04	14.71	15.12	0.41	0.654

◇分散の差 $F = 1.04$

自由度は 92 と 78 であり、F 分布表の 40 と 80 の欄の 5% の F_t でも 1.54 であるから、 $P\{F | N(1.04) > 0.05\}$ となり、分散の差は認められなく。

◇平均の差 $t = 0.654$

t 分布表の自由度 80 の欄の 50% の t でも 10.5 = 0.679 であるから、有意な差があるとは云えない。
以上のことから、保育によって言語の理解能力は高くなるということができる。

性によってみられる差の検討

	男	女	差
全国児	15.21	14.22	0.99
五才児	16.09	14.66	1.43
四才児	14.53	13.72	0.81
三才児	12.78	12.91	0.15

男女によって上表のような差がみられる。この差を検討してみると、全国児・五才児・四才児には有意な差が認められ、三才児には有意な差が認められない。

このことから、三才以下においては男女の差がないか、或はあつても僅かであるが、四才・五才と年齢が大きくなるに従つて、その差も大きくなり、女兒よりも男児の方が優秀であると云い得るのではなからうか。

言語は男児よりも女兒の方が優秀であると、普通一般に云われているが、上記のことから考察してみると、女兒が優秀であるということは言語の流暢さということ、即ち云いかえてみると、男児より女兒の方がおしゃべりであり、言葉をよく使用するということにあるのではなからうか。

動作主体テストが絶対的に信頼し得るものである限りにおいて、言語理解能力は男児の方が優秀であると考えて差支えなからう。

〔統計学的な検討〕

○全園児

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
177	178	3.07	3.09	1.01	15.21	14.22	0.99
							3.02

◇分散の差 $F = 1.01$

自由度は 176 と 177 であり、F 分布表の 300 と 300 の欄の 5% の F で 1.26 であるから、 $P\{F \geq 1.01\} > 0.05$ となり、分散の差は認められなう。

◇平均の差 $t = 3.02$

t 分布表の自由度 8 の欄の 0.5% の t でも 10.005 = 2.81 であるから、 $P\{|t| \geq 3.02\} < 0.005$ となり、二つの平均の差は 0.5% 以下の有意水準でもって有意である。

・五才児

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
91	103	2.59	2.93	1.28	16.09	14.66	1.43
							4.55

◇分散の差 $F = 1.28$

自由度は 90 と 102 であり、F 分布表の 100 と 125 の欄の 5% の F で 1.36 であるから、 $P\{F \geq 1.28\} > 0.05$ となり分散の差は認められなう。

◇平均の差 $t = 4.55$

t 分布表の自由度 120 の欄の 0.1% の t でも 10.001 = 3.97 であるから、 $P\{|t| \geq 4.55\} < 0.001$ となり、二つの平均の差は 0.1% 以下の有意水準でもって有意である。

・四才児

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
68	64	3.03	3.20	1.21	14.53	13.72	0.81
							2.12

◇分散の差 $F = 1.21$

自由度は 67 と 63 であり、F 分布表の 75 と 65 の欄の 5% の F で 1.47 であるから、 $P\{F \geq 1.21\} > 0.05$ となり、分散の差は認められなう。

◇平均の差 $t = 2.12$

t 分布表の自由度 120 の欄の 5% の t でも 10.05 = 1.98 であるから、 $P\{|t| \geq 2.12\} < 0.05$ となり、二つの平均の差は 5% 以下の有意水準でもって有意である。

・三才児

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
18	11	2.98	3.47	1.29	12.78	12.91	0.15
							0.09

◇分散の差 $F = 1.29$

自由度は 17 と 10 であり、F 分布表の 20 と 10 の欄の 5% の F でも 2.77 であるから、 $P\{F | \sqrt{1.29}\} > 0.05$ となり、分散の差は認められな。

◇平均の差 $t = 0.09$

検討の余地なし。

年令によつてみられる差の検討

差	四才	五才	差	四才
1.22	14.14	15.36	1.31	14.14
	三才	四才		
	12.88			

年令によつては上表のような大きな差がみられる。これが有意な差であることは論ずるまでもないことである。

〔統計学的な検討〕
・五才と四才との差

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
194	132	2.74	3.11	1.29	15.36	14.14	1.22
							3.72

◇分散の差 $F = 1.29$

自由度は 193 と 131 であり、F 分布表の 200 と 150 の欄の 5% の F でも 1.29 であるから、 $P\{F | \sqrt{1.29}\} > 0.05$ となり、分散の差は認められな。

◇平均の差 $t = 3.72$

t 分布表の自由度 ∞ の欄の 0.1% の t でも、 $t_{0.001} = 3.37$ であるから、 $P\{t | \sqrt{3.72}\} > 0.001$ となり、二つの平均の差は 0.1% 以下の有意水準をもって有意である。

・四才と三才との差

n_1	n_2	S_1	S_2	F	x_1	x_2	$d = \frac{x_1 - x_2}{t}$
132	29	3.11	3.25	1.29	14.14	12.83	1.31
							2.02

◇分散の差 $F = 1.29$

自由度は 131 と 28 であり、F 分布表の 200 と 28 の欄の 5% の F でも 1.69 であるから、 $P\{F | \sqrt{1.29}\} > 0.05$ となり、分散の差は認められな。

◇平均の差 $t = 2.02$

t 分布表の自由度 120 の欄の 5% の t でも、 $t_{0.05} = 1.98$ であるから、 $P\{t | \sqrt{2.02}\} > 0.05$ となり、二つの平均の差は 5% 以下の有意水準をもって有意である。

・本テストの問と答

・テストに対する反応の分析（百分比）

		三才	四才	五才
正答	単純な答	62.1%	64.4%	69.1%
	多様な答	.2	1.5	2.3
	特定の個人に関連する答	.4	.7	.4
	複雑な理由のある答	1.2	3.6	2.3
誤答	単純な答	11.6	11.2	10.0
	複雑なテクラメな答	0	.8	.6
無答	シリマセン	4.8	3.7	2.4
	無答	19.7	14.1	12.9
未了		0	0	0

〔註〕
小数第
一位未
満
四捨五入

・各問に対する正答者の割合（註） 小數位未満四捨五入

	三才	四才	五才
1 scratch	41%	58%	69%
2 sleep	62%	59%	71%
3 fly	93%	84%	89%
4 bite	72%	78%	86%
5 swim	90%	93%	89%
6 burn	86%	88%	95%
7 cut	90%	91%	92%
8 blow	62%	77%	85%
9 shoot	82%	88%	86%
10 melt	69%	80%	84%
11 sail	31%	33%	52%
12 boil	65%	72%	76%
13 float	69%	70%	75%
14 grawl	10%	27%	26%
15 sting	69%	82%	86%
16 gallop	31%	42%	61%
17 ache	62%	71%	73%
18 explod	14%	43%	50%
19 roar	82%	72%	85%
20 mew	100%	99%	100%

・テスト所要時間

	三才	四才	五才
約分	%	%	%
2			2
3			22
4	11	26	30
5	30	37	28
6	48	7	9
7	7	5	5
8	4	3	2
9		2	2
10		1	1

〔註〕 小數位未満四捨五入

○まとめ

以上の結果をまとめてみると、

- (一) テストそれ自体が日本語を基盤にして作られたものではないから子供の生活とマッチしない部分が認められた。特に或る問題では九九までの子供が正しく答え、それに反して、或る問題では僅か二〇%ぐらいの正答者があっただけであった。次の機会にはこれを参考資料にして、不適當な問題を除くようにしなければならない。
- (二) テストする人自身が正しい言葉を持っていないとてはならないことは固よりのことであるし、また方言がしばしば出たことも考えさせられる一部面である。
- (三) 五才児では十五・四才児では十四・三才児では十二以上の正答をすることができ。
- (四) 語彙の理解能力は年齢によって差があると同時に、保育年数や性別によっても大きな差異のあることがわかった。このことは幼稚

各問に対する答の代表的なもの

1	serach	ひつかく	アカチャン、テ、ツメ サル、ネコ
2	sleep	ねむる	ネコ、ニンゲン、マクラ、フトン
3	fly	飛ぶ	ツバメ、ハネ ヒコーキ、トリ
		跳ぶ	ウサギ、ニンゲン、アシ
4	bite	噛みつく	イヌ、ライオン、クチ、テ(ヲ)
5	swim	泳ぐ	サカナ、ニンゲン、テ、ウミ カイスイヨク、ウキブクロ
6	burn	燃える	カミ、マッチ、カジタキビ カチカチヤマ
7	cut	切る	カミ、タキモノ、ニンゲン、ハサミ ノコギリ
		着る	ヨーフク、ニンゲン
8	blow	吹く	カゼ、
		拭く	エンガワ、ツクエ、ゾーキン ニンゲン
9	shoot	射つ	テッポウ、ニンゲン
		打つ	カナヅチ、バット、ニンゲン クギ、ボール、ヤキユウ
10	melt	溶ける	コオリ、サトウ
11	sail	水の上 を走る	フネ、ボート
12	boil	煮える	ゴハン、オカズ、ナベ、カマ
13	float	流れる	ミズ、カワ、ナガレボシ、リンゴ ミカン、キュウリとクツ、ゴミ
14	groal	うなる	ビヨウニン ライオン
15	sting	刺す	ハリ、タケ、ニンゲン、イカ、イモ ハチ
		指す	ニンゲンのユビ
16	gallop	かけあし	イヌ、ウマ、アシ、ウンドウカイ ニンゲン
17	ache	いたい	ハリ、チュウシヤ、キズ、ケガ、ハ ラ、アシ
18	explode	爆発する	バクダン
19	roar	ほえる	イヌ
20	mew	ニャー ニャー	ネコ

園の言語指導をする上において非常に重要なことであることを示すものである。

④ 答の内容が五才と三才では非常な相違をもってしていると共に、生活環境によっても相違がある。

〔例〕

・「かけあしするものなあに？」に対して、五才児の多くは「ニン

ゲン」・「イヌ」・「ウマ」と答え、三才児には「ウンドウカイ」と答えるものが多くみられた。

「ながれるものはなあに？」に対して、堀川沿いに住む多くの子供は「ゴミ」と答えた。事実、名古屋市中心部を南流している堀川には、沿岸市民が「ゴミ」をよく流している。